

海辺のホモソーシャリティ、あるいはその亀裂について

— 夏目漱石「行人」を中心に —

瀬崎圭 二

一、青年たち

海には幸の多い日であった。鉤に懸つた鯉は、婦女や子供の群に引かれて、幾尾となく陸へ上つた。

斯の光景を眺め乍ら、暫時二人はそこへ足を投出して、暖心地の好い砂を身体に塗りつけた。甲羅を干す積で岸本は這倒つて見たが、首を傾げると、耳から汐水が流れて出る。同時に、両国の河岸でよく泳いだこと、家を飛出して最早九ヶ月に成ること、奥州のはてまでも遠く旅したことなどを思出す。青木は自分で自分の膝頭を抱いて、不調和な社会に倦み疲れたやうな眼付をした。終には、其の膝頭へ額の着くばかりに重苦しい頭を垂れた。而して、熱と目を瞑つて、岸に砕ける浪の音を聞いた。

(傍線引用者)

島崎藤村「春」(『東京朝日新聞』明治四一・四く八)のこの一節は、明治四一年一〇月に上田屋からこの小説が単行本化された際に添えられた和田英作の口絵(図一)によって、つとに留意されてきた場面である。妻の操が娘の鶴子を一緒に海に連れて行くよう夫の青木に頼むが、青木は泣き慕う鶴子の声を聞き捨てて、逃げるよ

うに友人の岸本と海へ向かう。二人が海でひとしきり泳いだ後浜辺で体を休めていると、青木は口絵に描かれるような姿勢をとるのである。「其の膝頭へ額の着くばかりに重苦しい頭を垂れた」この身体のあり様には、家庭や生活の問題と自己の文芸的問題の葛藤に苦しむ青木の内面が集約されていることは言うまでもない。そのような青木と、教え子との恋愛に懊悩して漂泊の旅に出た岸本とが海辺で二人もの思う姿が、この小説が単行本化される際に口絵に相応しい場面として選択されたのであった。

【図一】



和田英作画

周知のように、「春」は藤村ら『文学界』同人をモデルにした自伝的小説である。この小説に表象される青年たちの連帯は、例えば岸本が恋した勝子を「盛岡」という土地の「符牒」で呼び合うように、「ホモソーシャル」(イヴ・K・セジウィック)¹な関係の中にある。木村直恵によれば、明治二〇年代初頭に誕生した「青年」的なもの²とは、「過去から未来へと連続する時間のなかで自己を捉え、それぞれの時点の自己を対照し、反映させ合うというきわめて内省的な作業のなかから自らを主体化していくやり方」²のことであると、その絆とは、「春」の青年たちの場合、雑誌という媒体に詩文を寄せるといふ行為を通じて構築される文学者としての〈主体性〉を互いに共有するという意味での絆に他ならない。先の引用箇所の時間設定は、そうした青年の誕生時期とほぼ重なる明治二六年ではあるが、テキストの記述や口絵が表象したその結果の姿は、表象の体系の中で海辺における青年たちのホモソーシャリティがより前景化している³。明治四〇年代の力を受けているようにも見える。いやむしろ、表象の体系がそのような年代という区分によって明確に断絶化し得るものでないことを鑑みれば、「春」に刻まれたこのような表象は、近代の海辺と青年たちの姿をありのままに写し取ったその結果であるとも言えよう。日本の近代が男性たちのホモソーシャルな関係によって構造化されてきたのであるならば、当然それは海辺を舞台とした文学的表象の磁場にも及んでいくのであり、引用した「春」の一節や口絵とは、その一つの表徴に過ぎない。したがって、その表徴は藤村のテキストだけに限定されるはずもなく、他のテキストにも及んでいることは自明であらう。

例えば、夏目漱石の後期三部作と呼ばれる「彼岸過迄」(『東京朝日新聞』明治四五・一〜四)、「行人」(『東京朝日新聞』大正元・一二〜大正二・一一)、「ころ」(『東京朝日新聞』大正三・四〜八)は、いずれも主要な男性作中人物二人が海辺で出会ったり、語りたりするような場面を用意しており、しかもこれらの場面が物語の中で重要な展開を担っている。「彼岸過迄」ならば、高木の出現により須永の嫉妬が喚起される鎌倉避暑の場面、「行人」ならば、和歌の浦での直をめぐる一郎と二郎の会話や、一郎とHさんが旅行に出かけるテキストの末尾、「ころ」ならば、先生と「私」との出会いが描かれるテキスト冒頭や、先生とKの房州への旅の場面がそれに当たるだろう。それぞれに設定された海辺という場における状況は微妙に異なっているが、大雑把な整理をするならば、「彼岸過迄」では、高木の出現により、須永に千代子への欲望や高木への嫉妬が生じる。「△三角形的」欲望」(ルネ・ジラルル)⁴の関係性が鎌倉の海辺で表出し、「行人」や「ころ」では、一郎とHさんの伊豆周辺への旅行や先生とKの房州旅行などにおいて海辺における男性二人の関係性が前景化しており、まさしくホモソーシャルな関係が表出している。三角形的欲望によって築きあげられる関係性とホモソーシャルな関係性とは、イヴ・K・セジウィックがルネ・ジラルルの三角形的欲望の図式を読み替えることでホモソーシャル体制を指摘したように⁵、軸を一にする構造であると言える。つまり、自己の欲望が他者の欲望の模倣であることを明らかにしたジラルルの三角形的欲望の問題を、近代の男性中心主義的なシステムに即して捉え直したのがセジウィックのホモソーシャル理論であった。したがって、漱石の後期

三部作で描かれる海辺の男性同士の関係性は、基本的には同じ構造を問題化しているのである。それを「男」二人を物語り「女」を他者化し排除する「漱石的三角形」(飯田祐子⁶⁾)であると言ってもよい。

後期三部作に限らず、漱石のテクストに表象されるこうしたホモソーシャリティについては既に多くの先行研究があり、もはや分析の前提となつているとも言える。「ホモソーシャル」という切り口の可能性にやや食傷気味でもある⁸⁾と述べる論者もいるほどだ。しかし本稿は、漱石テクストの特徴としてしばしば指摘されるホモソーシャルティの問題を、海辺という場との連関からそれを捉え直すという点にその主眼がある。先に挙げた「春」の口絵が物語るように、おそらくそれは漱石という一人の名によって括られるテクスト群の〈特徴〉の問題だけではなく、海辺の近代における表象の側面でもあるからだ。そのような意味で、本稿は、文学テクストとしての「行人」を論ずることに目的があるわけでもなく、それを新しく読み替えることに目的があるわけでもない。本稿の目的は、海辺の表象を含み持つ「行人」というテクストを表象の一類型としてとりあげ、その表象の振幅を問うところにある。

そもそも漱石の文学テクストにおいて男性同士の避暑旅行が成り立つのは、「行人」の一郎、「こころ」のKのように、その一方の男性が陥った神経衰弱の対処のためである。「こころ」における先生とKの房州旅行は、その物語内容の時間設定からすると日清戦争後のことであると推測され、そのテクストの記述が語るように、Kが房州の海へ身を浸すのは神経衰弱への対処法でもあった。この頃にな

ると海水に身を浸す海水浴は、厳格な医療行為というよりも単なる保養としての意味合いが濃くなってくるが、呉秀三編『精神病学集要』(前編 明治二七・九 後編 明治二八・八 吐鳳堂書店)等の書物に見られるように、海水浴は神経衰弱症に効能があることが医学の中で保証されていた⁹⁾。先生とKの房州旅行はいずれの意味も兼ね備えているようである。「行人」における一郎とHさんの伊豆周辺への旅行も、やはり神経衰弱に陥った一郎への対処のためであり、この旅行も、当時の医学が訴えるところの転地療法に則つたものである¹⁰⁾。当時の医学では山間部の温泉場や海辺が転地先として推奨されるケースが多く、一郎とHさんの旅行もそれらの移動を繰り返している。

そのような医学的な意味に加えて、占部百太郎『青年の修養』(明治三九・七 内外出版協会)に「暑中休暇は来れり、吾々青年はこの楽しき休暇を如何に利用す可き乎。／空しく過せば一日尚ほ惜む可きも、之を利用し善用すれば、二ヶ月の休暇決して長しと云ふ可からず。年中屹々として頭を書中に没するのみ学問とは云ふ可からず。書籍より得たる印象は薄弱にして価値案外に少なし。広く悠々たる自然界や活動止むなき人間社会を観察するをこそ、真個の学問とは称すべきなれ。暑中休暇を利用するは、即ち旅行に如くはなきなり」とあるように、休暇中の旅行は青年たちの修養の一環としても意味づけられていた。明治三〇年代後半から四〇年代は統々としてこうした修養書が刊行された時期であり、修養は青年たちの人格を高め、その成功を促すためのイデオロギーとして青年たちの身を取り囲んでいたのである¹¹⁾。

新渡戸稲造『修養』（明治四四・九 実業之日本社）はその中でも広く読まれたものの一つであるが、ここにも「暑中の修養」として「夏季の間に、肉体的の活力を涵養すると共に、精神の持ち方を心懸ることが必要である」ことが説かれた上で、「一日を海浜に送り、肉体の健康を養ふと共に、快活なる大洋を見ては、偉大の思想を起し、晴天の夜、星斗の欄干として輝けるを見ては、天空の宏大なるを身に沁々と感じ、はた又海水に游泳するにしても、直接間接に精神修養の資料とする心がけさへあれば、如何なる事柄よりも教訓を受けられる。小説や新聞の三面記事の如きは、之を読む男女間に面白からぬ関係を生じ易く、折角保養せんとして行つた温泉場も、却つて健康を害する様なことは、間々見聞することである。併し此等の弊害とても、心懸一つでは、之を避け利益のみを収め得られるであらう」という一節が続いている。

青年の夏季休暇旅行で生じる「男女間に面白からぬ関係」は、既に「小説や新聞の三面記事の如き」ものという通俗的なイメージのもとに捉えられており、避暑地での男女の¹²出会いはこの言説では周縁化された要素に成り下がっている。論じるべき価値の中に置かれているのは青年の内面のみであり、「快活なる大洋」を眺め、「海水に游泳すること、あるいは旅先で「小説や新聞の三面記事の如き」ことを経験するのも、全て「心がけ」さえあれば「精神修養」へと結びついていくというこの認識は、海辺で夏を過ごすことそのものが、青年の「精神修養」に直結していくことを説いていることとなる。海辺でのあらゆる経験が修養をもたらすならば、これほど容易い修養の方法はなく、青年たちが海浜に赴く恰好の論拠となるだろ

う。「心懸一つ」では「利益のみを収め得られる」とされる男女間の関係は懸念されるべき要素ではあるが、これを予め回避するためには「男女間」で「快活なる大洋」を眺め、「海水に游泳すること」を避け、青年同士でこれらを行うことが無難であることを説いているようにも見える。ここで意味づけられている修養とは、徹底して青年という男性のそれであるからだ。

ともあれ、こうした言説に意味づけられた青年の修養としての旅行が、「行人」や「こゝろ」に表象されるような男性同士の避暑旅行の土壌を支えていることは確かだ。

二、夏目漱石「行人」「こゝろ」と海辺

「行人」には、そのような青年同士の旅行先も含めて、海辺の地が多く物語の中に登場する。岡田夫妻と二郎が佐野に面会する浜寺、一郎夫妻と二郎、母親で滞在する和歌の浦、そしてHさんと一郎が旅行する伊豆がそれである。前述したように、一郎とHさんの伊豆旅行は一郎の神経衰弱への対処のためであり、この旅行が男性二人の緊密な関係に支えられていることは明らかだが、二郎と三沢の關係に旅行が大きくかわっていることも留意されるべきだろう。

「行人」は「友達」と名づけられた章によって開始されており、そこには大阪での三沢との合流を絶えず気にする二郎の姿があり、「あの女」をめぐる二人のやりとりを経て、三沢の帰京によりこの章は閉じられる。もともと二郎と三沢は大阪で合流した後高野登りを約束していたこと、¹³時間があれば伊勢から名古屋へまわろうと

決めていたことが語られており、二郎と三沢の二人による旅行が計画されていた。それ故に二郎は、三沢が大阪に到着した時に一緒にいた五六人の「伴侶」の存在を気にかけて、「其五六人の伴侶の何人であるかに就いて思ひ悩んだ」のである。二郎は、三沢の「伴侶」について「思ひ悩んだ」ことを語り、その名の「想像さへ浮ばなかつた」ほど三沢との親密性に信頼を寄せている。二人が取り交わす「君大阪へ着いたときは沢山伴侶があつたさうぢやないか」「うん、あの連中と飲んだのが悪かつた」という会話は、二人だけの約束が踏みにじられたことに対する二郎の三沢への当て擦りと、三沢の弁解のようにも見え、概してこのエピソードに対する二郎の語りには、三沢の「伴侶」に対する二郎の嫉妬が滲んでいる。

同時に、三沢は大阪での二郎の滞留先について「念を押し」、二郎は三沢からの連絡を心待ちにしている。ようやく三沢からの葉書が滞留先である岡田の家に届いた際、お兼が「とう／＼参りましたね。お待ちかねの……」と冷やかすほどだ。二郎は、「三沢と一所に歩く時の愉快」を想像し、富士と一緒に登ったときのことを思い出しながらさらに三沢からの連絡を待っていると、入院を記した手紙が三沢から届くのである。

このような強い絆の中にある二郎と三沢だが、三沢が五六人の伴侶と飲みに行った茶屋で会い、無理に酒を飲ませた「あの女」がこの二人の關係に介入することで、そのホモソーシャリティは一層際立っていく。二郎と三沢との間に交わされる「あの女」の名は最後まで明かされることはなく、「春」同様、あたかも符牒のように男同士の間にも共有されている。「あの女」は、「美しい看護婦」と共に二

人的関心の対象として病院での二人の話題の中心ではあるものの、その視線が主体化されることはない。

「あの女」を見舞い、退院して帰京する三沢が、汽車の待ち時間に「あの女」と精神に異常を来した「娘さん」とを重ね合わせていたことを語ったとき、三沢の「あの女」への執心の理由が二郎に明らかになるが、そこで「あの女」の為に、又「其娘さん」の為に三沢の手を固く握った二郎の身振りとは、「娘さん」と「あの女」とを接続する三沢の物語を共有するところに成り立つ「男同士の絆」を表象するものでもあろう。むしろ、二人によるその物語の共有とは、「娘さん」や「あの女」への憐憫という排除に他ならない。このような二人の絆は、テクストにおいて一貫して維持されており、あたかもその友情關係が同性愛關係に転化していくのを隠蔽するかの如く、三沢が二郎に自分の結婚相手を紹介したり、二郎の結婚相手を周旋したりしようとするのである。

注意すべきは、このように表象される關係性の背後に、やはり海辺という状況設定が纏わりついているということだ。

「僕には左右いふ事情があるんだからもう少し此処に待つておなればならないのだ」と自分は大人しく三沢に答へた。する
と三沢は多少残念さうな顔をした。

「ぢや一所に海辺へ行つて静養する訳にも行かないな」

(中略)

「海岸へ一所に行く積りででもあつたのか」と自分は念を押し
て見た。

「無いでもなかつた」と彼は遠くの海岸を眼の中に思ひ浮かべ

るやうな風をして答へた。此時の彼の眼には、實際「あの女」も「あの女」の看護婦もなく、たゞ自分といふ友達がある丈のやうに見えた。

(中略)

自分の「あの女」に対する興味は衰へたけれども自分は何うしても三沢と「あの女」とをさう懇意にしたくなかつた。三沢も又、あの美しい看護婦を何うする了管もない癖に、自分丈が段々彼女に近づいて行くのを見て、平気でゐる訳には行かなかつた。其処に自分達の心付かない暗闘があつた。其処に持つて生れた人間の我儘と嫉妬があつた。其処に調和にも衝突にも発展し得ない、中心を欠いた興味があつた。要するに其処には性が争ひがあつたのである。さうして両方共それを露骨に云ふ事が出来なかつたのである。(傍線引用者)

ここには、「あの女」やその看護婦との関係よりも優先されるべき「友達」の関係があることを前提とした二郎の語りが横たわつてい¹⁵る。「三沢と一所に歩く時の愉快」を思い出す二郎の語りの遠近法は、三沢の内面を「自分といふ友達がある丈」のように捉え、二郎と「美しい看護婦」の接近に対する三沢の心の動揺を読み取る。二郎が三沢の眼の中に感じ取つた「遠くの海岸」の想起は二郎の欲望の反映であると共に、二郎との海岸での静養を口にした三沢のそれでもあり得るだろう。二郎の語りは、この事態を「持つて生れた人間の我儘と嫉妬」、すなわち「性の争ひ」という語で捉えているが、そこにはホモソーシャル体制を本質主義的に内面化した二郎の姿がある¹⁶。同時に、その語りの中では、男同士に共有されるこの「遠く

の海岸」こそが、その「性の争ひ」を回収し、「性」をめぐるシステムを維持するイメージのもとに語られているのである。

こうしたホモソーシャルな場としての海辺のイメージは、一郎と二郎の関係性の中にも表出する¹⁷。暑い大阪を避けて「有馬なら涼しくつて兄の頭に宜からう」と二郎が有馬行を思い立つたのに反して、「意外にも和歌の浦見物が兄の口から発議された」理由も、和歌の浦という海辺が醸し出すイメージと無関係ではないだろう。古代から景勝の地とされた和歌の浦は、明治三六年三月に南海電鉄によって難波駅と和歌山市駅が結ばれ、明治末年までには和歌山水力電気の路面電車によって和歌山市駅と和歌の浦や紀三井寺が結ばれたことで観光地化されていくことになり¹⁸、一郎たちもそのような交通網を利用して和歌の浦見物に赴くわけだが、二郎が「意外」に感じるこの一郎の「発議」の中には、海辺での二郎への親密な相談が既に予定されていたのかもしれない。実際、一郎が二郎に「直の節操を御前に試して貰ひたい」と依頼する場合は、眼下に「遥の海が鯛の腹のやうに」輝く、紀三井寺のベンチであつた。

また、一郎の神経衰弱のため、二郎からの依頼を受けて実現した一郎とHさんの旅行は、沼津、修善寺、小田原、箱根、紅が谷と、伊豆から相模へとまわる旅行であり、度々二人は浜辺で議論をしたり、箱根の山に登ったりしている。旅行中、常に行動を共にし、議論を取り交わす学問を介した二人の交流は、「だから妾の事なんか何うでも構はないのよ。だから旅に出掛けたのよ」と直に言わせるほど、女性の入り込む隙のないものだ。テクストは、一郎が嫌う「三保の松原だの天女の羽衣だのが出て来る所」や、「若い男と若い女ば

かり」が集う場としての海辺を記述してはいるものの、この二人のホモソーシャリティにおいては、場が孕んでいるそのような要素は後景に追いやられていくのである。

周知のように、こうした海辺のホモソーシャリティは、「行人」に続く長編小説「ころ」の冒頭を深く彩つてもいる。

或時先生が例の通りさつさと海から上つて来て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着ようとすると、何うした訳か、其浴衣に砂が一杯着いてゐた。先生はそれを落すために、後向になつて、浴衣を二三度振つた。すると着物の下に置いてあつた眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ兵児帯を締めてから、眼鏡の失くなつたのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ツ込んで眼鏡を拾ひ出した。先生は有難うと云つて、それを私の手から受け取つた。

次の日私は先生の後につゞいて海へ飛び込んだ。さうして先生と一所の方角に泳いで行つた。二丁程沖へ出ると、先生は後を振り返つて私に話し掛けた。広い蒼い海の表面に浮いてゐるものは、其近所に私等二人より外になかつた。さうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照してゐた。私は自由と歓喜に充ちた筋肉を動かして海の中で踊り狂つた。先生は又ぱたりと手足の運動を已めて仰向になつた儘浪の上に寐た。私も其真似をした。青空の色がざら／＼と眼を射るやうに痛烈な色を私の顔に投付けた。『愉快ですね』と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上る様に姿勢を改めた先生は、『も

う帰りませんか』と云つて私を促した。比較的強い体質を有つた私は、もつと海の中で遊んでゐたかつた。然し先生から誘はれた時、私はすぐ『えゝ帰りませう』と快く答へた。さうして二人で又元の路を浜辺へ引き返した。

(傍線引用者)

テキストの記述に従えば、「私」が先生に注視するきっかけは、先生と共にいた西洋人が「優れて白い皮膚の色」で「猿股一つ」という他とは大きく異なる身体であつたことにある。「私」が先生に声を掛けるのは、海辺で「知つた人も一人も有たない私」が、その「賑やかな景色に裹まれて」愉快に感じながらも、次第に苦しむようになつた「無聊」からの脱出のためであり、とりもなおさずそれを「私」に促したのは、それが海辺という場であつたからに他ならない。つまり、男性の欲望のもとに形作られた男女の出会いの場としての海辺の通俗的イメージと、青年たちや知識階層のホモソーシャルな場としての海辺のイメージとが混じり合つたところに生成する場の力こそが「私」をして先生に声を掛けさせるのである。海で「私」が感じる「自由と歓喜」、そして「愉快」とは、その場によつてもたらされたものに他ならない。

「私」と先生との海辺の出会いに関して、「ころ」を「ゲイ小説」とした小谷野敦は、「出会いの場所が海岸に設定されているのは、死によつて永遠化される愛というドイツ・ロマン派の美学の舞台として、水のほとりがひとときわ相応しく思われたからでもあるが、(中略)「海彼」に死後の他界を見出すという日本的な観念が作用して、男と男の海岸での出会いが設定されたとも想像できる」と述べている⁽¹⁾。また、「同性愛小説」として「ころ」を捉えた大橋洋一は、「当

時の海水浴場では男女とも裸体の露出度は低かったとはいえ、裸体の周密な環境のなかでの出会いは、それ自体エロティックだが、そのなかでも「我々の穿く猿股一つの外何者も肌に着けてあなかつた」西洋人の男の裸体は、エロスの濃厚なアウラを漂わせている」ことを指摘した上で、Kという「この西洋人の変異体」を携えた先生と「私」の出会いを、テキストから抽出されるホモソーシャルな構造に連なるものとして位置づけている。

Kの神経衰弱の対処のためのKと先生の房州旅行は、先生がKに神経衰弱を見出した結果から実現したものであるが、いつしかKのお嬢さんへの思いを疑い始めた先生の方が神経過敏になっていったと語られる。Kから先生への神経衰弱の転移と、お嬢さんの好意が先生にあるのかKにあるのか全く顧慮されない形の三角関係は、前述した「漱石的三角形」のステロタイプであり、先生とKの関係がホモソーシャルなものであることはもはや言うまでもないが、先生とKのこの避暑旅行は、テキスト冒頭の先生と西洋人の関係、さらには先生と「私」への関係へと連続していくものである。そうした知の共有と伝達を前提としたこの絆が支える「こころ」というテクストに、出会いとホモソーシャルなイメージとが覆い重なった一見奇妙なこの冒頭が用意されていることは象徴的であり過ぎるのである。

三、関係の亀裂

さて、「春」、「行人」、「こころ」といった文学テキストから海辺の

ホモソーシャリティを抽出してきたが、「行人」には、そのような男同士の関係性に対する相対的な揺らぎと亀裂が見られる。それは、とりもなおさず一郎の神経衰弱をめぐる表象によるものだ。あるいは、二郎の語りから垣間見える直の姿にも留意すべきだろう。そのような要素を孕んでいるという点において、「行人」は他のテキストとは聊か異なつた表現の密度を備えているのである。

二郎の語りから垣間見える直の姿とは、一郎から直の「節操を試す」という依頼を受けて実現した二郎と直の和歌山見物で、二人が突然の暴風雨のため和歌山の宿に泊まることを余儀なくされたその夜に、直が二郎に見せる一面である。そもそも和歌山に宿泊することとは、暴風雨のため電話も電車も通じなくなった状況を見越した上での二郎の判断であるようだが、この状況に対して発せられた「女だから何うして好いか解らない」、「女一人で此暗いのにとても和歌の浦迄行く訳には行かない」という直の台詞は、判断を二郎に委ねる根拠を「女」であることに置いている。そのような意味での「女」としての直の一面が、暴風雨や義弟との不意の宿泊という極めて特異な状況の中で仄めかされていくのである。一郎と二郎という兄弟によって結ばれた絆は、当初は「遙の海が鯛の腹のやうに」輝く和歌の浦の海のような静けさを保っていたが、その絆によって発せられた直の「節操を試す」という一郎の依頼は、平穩だったその〈男同士の絆〉に不穩な影を落とす契機ともなっている。平穩な海辺を混乱に陥れる暴風雨が和歌山の夜を襲ったとき、その海辺のホモソーシャリティを掻き乱すが如く、直の「女」が首を擡げるのだ。

二郎の語りによって再現される和歌山の夜の直は、暗闇の中で「此

処へ来て手で障つて御覧なさい」と二郎に言った後、着物を浴衣に着替えるために帯を解き始める。それは二郎の「度胸」のなさを見越した上での発言かもしれないが、「手で障つて御覧なさい」という指示はその行為の実現を促す可能性を持つていもう意味において、自らの身体への接触を許容するような意味の振幅を生じさせる発言にもなり得る。しかも、下女が蠟燭を持つてきても、直は着替えを止めてはいないようだ。あるいは、蠟燭の光の中で直が顔に塗ったクリームは、二郎が白粉と勘違いし、「艶かしい」と感じているものでもある。こうした発言や着替え、化粧といった直の言動は、一郎と二郎の絆に亀裂を入れる何かであり得る。直の「節操を試す」という一郎の依頼は、節操を試される位置に置かれた直の受動性を固定化した発想であるが、二郎の語りから垣間見えるこれらの直の言動は、試されているのではなく、むしろ二郎を試しているようにも見える²⁰¹。

そして、暴風雨の中で喚起される直の死への欲動にも注意すべきだろう。この夜、明らかにされた直の理想の死に方とは、「大水に攫はれるとか、雷火に打たれるとか、猛烈な一息な死に方」であり、直は二郎に「嘘だと思ふなら是から二人で和歌の浦へ行つて浪でも海嘯でも構はない、一所に飛び込んで御目に懸けませうか」、「屹度浪の中へ飛込んで死んで見せるから」とも語る。前述したように、和歌山の暴風雨とは、一郎と二郎の同性間に結ばれた絆によって維持されていた海辺のホモソーシャリティへの亀裂の隠喩であり得るが、その天候に呼応するかのように、二人の関係性の中で排除されていた女性である直も、二郎がそこに「昂奮」を読み取るほどの死

への欲動を口にするのである。直が「死ぬ事丈は何うしたつて心の中で忘れた日はありやしないわ」と語り、絶えず死を想うのは、排除され続けている女性の諦念であるとも言えると同時に、「浪の中へ飛込んで死んで見せる」ことよつて死する主体性を顕示することでもあるだろう²⁰²。暴風雨はホモソーシャリティへの亀裂の隠喩だが、それによつて荒れ狂つた海の中に直が自ら身を投じたその波紋とは、同性間の絆によつて強固に築き上げられたその場をさらに攪乱させることになるのだ。この夜、二郎は直の様子に「正体の知れない所」を見出し、他者としての女性を発見していくが、同時に二郎は直との一夜に「嬉しさ」や「愉快」を感じてもいる。すなわちそれは、ホモソーシャル体制を維持する女性嫌悪とは別のレベルの要素に他ならない。和歌山の夜とは、同性間で排除されていく他者としてではなく、二郎に関与しつづ違和を唱えるような他者の発見を、二郎が可能にしていく契機を形作つたのである²⁰³。

二郎は、暴風雨の翌日の自分について、直の「正体が知れないといふ簡単な事実」を「兄自身も自分と同じく、此正体を見届けよう」と煩悶し抜いた結果、斯んな事になつたのではなからうか」と語りもするが、「正体が知れない」ことを一郎との間で実際に共有するわけではない。それどころか、二郎は一郎に直の性質を報告するに際して、「嫂の態度が知らぬ間に自分に乗り移つて」、一郎に対して「大胆」になり、さらには、直への「新たな同情」が加わつて、一郎を「軽蔑」しさえするようになる。帰京後も、二郎は一郎の書齋に度々出入りしてはいるものの、一郎の「新しく得た知識を、はいはい聞いてある」ことが多く、二人の間に共有されるものは少ない。

二郎の語りからは、むしろ二郎が、学者としての二郎の話題に意図的に擦り寄るようなコミュニケーションを通じて、兄弟という関係性がかかるように維持されているように見える。つまり、既にここまでは、一郎と二郎とを結んでいたあの同性間の絆は極めて弱いものになっているのだ。これは、和歌山の夜を契機に、直の態度が二郎に転移した結果として、一郎を「軽蔑」という名で二郎が相対化し始めたことに加え、二郎が、あの和歌山の夜の直の様子を「正体が知れない」という語でしか一郎に伝達し得ないことによるものである。言い換えれば、直の「女」としてのあの夜の言動を、二郎はその翌日も、帰京後も、語りの現在においてすらもなお一郎に翻訳して説明すべき術を持ってないのである。

このとき一郎が二郎に向けて発した「お前はお父さんの子だけあって、世渡りは己より旨いかも知れないが、士人の交りは出来ない男だ」という語は、一郎と二郎の絆の決定的な断絶を指し示すものとして指摘されてきたが、ここで確認すべきは、一郎が二郎に期待する同性間の絆と、その父親が「職業上の必要から」、「貴族院の議員」や「ある会社の監査役」たちと築き上げている同性間の絆は微妙にレベルの異なるものであるということだ。父親の職業上、自ずと築き上げられてきたホモソーシャリティは、資本主義社会の中で経済的利益を共に追求する同性間の紐帯の謂であり、一郎はそのような絆を「軽薄」と斥けているのである。いずれも、女性を排除している同性間の絆であることは確かだが、二郎との間に措定されていた絆は、「士人の交り」と称する、より知的、精神的な繋がりであり、いつまで経っても直のことを報告しない二郎を、一郎は「士人

の交りは出来ない男」として評するに至る。一郎によって二郎がそのような判断を下された結果、テクストにおいて一郎と「士人の交り」を可能にする作中人物として表象されているのは、もはや一郎と同じ学者のHさんしかいない。奇しくも、一郎が二郎に「直の節操を御前に試して貰ひたい」と依頼する場が和歌の浦という海辺であつたのを反復するが如く、一郎とHさんは伊豆周辺という海辺へと旅行に出かけるのである。「行人」の海辺とは、「士人の交り」というホモソーシャリティを期待される場として表象されているのかもしれない。

前述したように、一郎とHさんの旅行は、Hさんが「我々二人は一所の室に寝ます、一所の室で飯を食ひます、散歩に出る時も一所です、湯も風呂場の構造が許す限りは、一所に這入ります」と語るように、非常に身体的な緊密性の高いものだ。二人は、沼津、修善寺、小田原、箱根と、海辺と山間部の移動を繰り返すが、いずれも一郎の気に入る場所ではなかった。Hさんが修善寺より前に提案した興津が、一郎によって「三保の松原だの天女の羽衣だのが出て来る所は嫌ひだ」と斥けられているということは、二人の関係性に介入する「天女」の出現するような浜辺を一郎が拒否していることを意味するものでもあろう。ようやく一郎が気に入ったのは、「二人ざりで独立した一軒の家の主人になり済まされたといふ気分」を味わうことのできる紅が谷の別荘であつた。二人の「士人の交り」を物理的に保証するような場が一郎の精神状態を安定させるに至るのである。

二人はこの紅が谷近くの海辺を散歩する。既に日は暮れて「若い

男と若い女ばかり」が集っている浜で、一郎は長野家の女中であつた貞の話をHさんにし始めるのだが、男女の恋愛の場とホモソーシャルな場とが混在したこの海辺の表象においても、前述したように、恋愛の場としてのそれは後景に追いやられていく。Hさんの手紙は、確かに「若い男と若い女ばかり」の紅が谷の浜辺を記してはいるのだが、「彼等は申し合せた様に、黙つて闇の中を辿つて」くるため、一郎やHさんの「前へ現れる迄は、丸で気がつかない」ような存在としてHさんに捉えられているのである。手紙によれば、一郎はその浜辺で長野家の女中であつた貞について唐突に語り始めたようだが、ここに「若い男と若い女ばかり」の浜辺が殊更に語られているのは、「兄さんは其宵に出逢つた幾組かの若い男や女から、お貞さんの花嫁姿を連想でもしたのでせう」とあるように、その一郎の話の唐突さを場との関係の中でHさんが事後的に理解しようとした記述の結果であろう。しかし、一郎とHさんに取り交わされる貞の話題は、女中という階層を「慾の寡い善良な人間」として過剰に理想化した形での一郎による女性の排除に寄り添っているという意味において、二人のホモソーシャルな関係性を前面に押し出すものに過ぎない。

この旅行で表象される二人の〈男同士の絆〉は、一郎の神経衰弱によつてそれが危機を迎えたときに場所を移動し、Hさんが一郎との対話を続けることで保持されていく。「塵勞」におけるHさんから長文の手紙は一郎の精神状態を慮つた上で二人の会話の内容に焦点化されているが、その手紙の記述のあり様こそがHさんと一郎との強い絆を指し示すものであることは間違いない。そして、それは、

二人の旅行の実現に関与した三沢や、Hさんからの長文の手紙を受け取る二郎をも含めたホモソーシャル連続体に連なつていくものでもあろう。Hさんは「三沢を教へた男」であるため、この関係性は知と血、すなわち師弟関係と血縁関係に基づいた濃厚な絆でもあるのだ。前述したような、和歌山の夜を契機とした二郎と直との連帯は、可能性としてテキストにわずかに顔をのぞかせているものに過ぎず、ホモソーシャル体制がシステムである限りにおいて、それが一郎と二郎の絆を断ち切つてしまうものではない。

ただ、Hさんから二郎へと届けられた件の手紙は、二人の強い絆のもとに生成するものではあつても、そこに垣間見える、神経衰弱に陥つた一郎の姿やその記述、さらには、それを二郎へと伝達していくという行為そのものが、否応なく他者としての一郎のポジションを浮き彫りにし、この濃厚な絆に亀裂を生じさせる契機を用意することになつてしまふだろう。Hさんの手紙は、⁽²⁶⁾ 図らずもその海辺のホモソーシャルティの亀裂を予感させるような記述を刻み込んでいるのだ。

例えば、一郎とHさんが最初に赴いた沼津の海は「眠つてゐる様な深い海」であり、「海も斯う静かだと好いね」と一郎が喜ぶほどであつたが、その後、沼津の浜辺で二人の話題が神へと及び、一郎の調子や眉間に「自然たさうなもの」が顫動するようになったとき、「静かな夏の朝の、海といふ深い色を沈める大きな器」と語られた海の中へ一郎が投げかけた小石は、二人の穏やかな関係性の保持を表象する件の海辺のホモソーシャルティに最初の波紋を投じている。〈穏やかな海〉がざわめき始めたとき、二人はそれから逃れるように山

間の温泉場である修善寺へと移動することになるのである。しかし、一郎が当初気に入っていた修善寺でも、Hさんは、一郎に山で「左の肩を二三度強く小突き廻され」、次の小田原では、議論の末、一郎に横面を打たれている。そうした二人の關係に呼応するかのようには、小田原の海は「薄どんよりと曇り掛けた空と、其下にある磯と海が、同じ灰色を浴びて、物憂く見える」のであった。次に向かった箱根では、雨と風の中、Hさんは、山を歩く一郎に付き合ひ、一郎がそこで発する「わあつと」という「原始的な叫び」について記している。

また、一郎が旅行中最も落ち着いている例の紅が谷近くの海辺においても、二人のホモソーシャリティを演出するが如く、「濃い夜陰の色にたつた一つ懸け離れて星のやうに光つてゐる」「微かな燈火」や、「西洋人の別荘」から聞こえてくるであろう「ピアノの音」、そしてそれに呼応するかのようには明滅する一郎の「煙草の先」の火について記されているが、そうしたロマンチックな雰囲気の中で一郎が話し始めたのは香巖という僧侶の話であった。二人の關係性を繋ぐべき「お貞さんのつゞき」の話を待ち受けるHさんに対して、一郎はその会話のコンテキストを裏切るかのようには、「ピアノの音にも、広い芝生にも、美しい別荘にも、乃至は避暑にも旅行にも、凡べて我々の周囲と現在とは全く交渉を絶つた昔の坊さんの事」を話し始めるのである。Hさんにも理解できないこの話題の展開は、Hさんが貞の話の続きを待ち受けていたことに表れているような、予定調和的な語らいを用意する海辺のホモソーシャリティを掻き乱していくのだ。

つまり、Hさんの手紙は、二人の關係性を保証するかのようには二

人の目の前にあつた海が、ざわめき、不穏な影を落す様子を語り、山間部での一郎の「芝居がりの動作」や狂態をも克明に記し、了解不可能な一郎の他者性を写し取っているのである。一郎の精神状態を慮つた上での記述とは言え、語る者と語られる者との分断は、「士人の交り」という男同士の絆を維持するには極めて危うい。

言い換えれば、夫や長男という記号性に自己を合致させることも、貞への思いに自己を投企することもできず、知という隘路の循環に陥つた一郎の神経衰弱、そしてその発話のあり様を再現しているこのHさんの手紙は、それ故にこそ予定調和的な語らいが共有されるべき海辺という場のホモソーシャリティにノイズを発信し続けることになるのである。石原千秋が指摘するように、一郎の神経衰弱は「〔知〕の言葉」すなわち「男の言葉」で語られているものではあるが、Hさんの手紙の中に表象される一郎の神経衰弱は、もはや「男の言葉」の領域に留まるものではないが故に、「男同士の絆」を築き上げるHさんとの間に共有されるべくもなく、そこから滑り落ちていく。テキストが、Hさんから二郎に送られた手紙によって終えられているということ、すなわち、神経衰弱に陥つた一郎の行方を記すことなく、紅が谷という海辺で神経衰弱という状態に留まり続ける一郎の姿によって終えられているということは、ホモソーシャルな場として表象されていた海辺という場を揺るがし続けていることと同義であろう。その動揺は、ホモソーシャル体制や家父長制度といったシステムへと及ぶものなのかもしれない。

本稿では、「春」、「行人」、「こころ」といった明治末期から大正初期の文学テキストをサンプルにしてそこに取り込まれた海辺のホモ

ソーシャリティについて考えてきたが、その表象が青年同士の旅や避暑を修養として意味づけた近代の産物であり、また表象そのものが連続性を孕むものであるという意味において、ここで取り上げなかったテキストにもそのような力が及んでいるであろうことは言うまでもない。それらを全て網羅することは到底できないが、少なくとも「行人」に刻まれた一郎の神経衰弱のあり様や、直による「女」の発露は、このテキストにそれらとの大きな差異を与えるものである。

- 注(1) イヴ・K・セジウィック『男同士の絆』(上原早苗・亀澤美由紀訳 平成一三・二 名古屋大学出版界) 参照。
- (2) 木村直恵『青年』の誕生 明治日本における政治的実践の転換』(平成一〇・二 新曜社) 参照。
- (3) 「春」の中で海辺は、岸本が入水を覚悟する「墳墓」としても表象されている。この点については、「海辺の憂鬱―物語としての『不如帰』―」(『名古屋短期大学研究紀要』平成二〇・三)で考察した「愛える女性」の表象の問題を交えて再考したい。
- (4) ルネ・ジラル『欲望の現象学』ロマンティックの虚偽とロマネスクの真実』(古田幸男訳 昭和四六・一〇 法政大学出版局) 参照。
- (5) イヴ・K・セジウィック『男同士の絆』(前掲書)の「序章」には、「本書は、ルネ・ジラルが『欲望の現象学』において三角形の図式という切り口からヨーロッパ文学のキャノンを読み解いたものを、焦点を変えて論じ直したものである」とある。
- (6) 飯田祐子『隠喩としてのジェンダー』(『彼らの物語』平成一〇・六 名古屋大学出版会) 参照。
- (7) 管見に入ったものを列挙すれば、小森陽一『「こころ」における同性愛と異性愛―「恋」と「罪悪」をめぐって―』(小森陽一・中村三春・宮川健郎編『総力討論 漱石の『こころ』』(平成六・一 翰林書房)、佐々木英昭『男の絆―『行人』の同性社会的世界』(『新しい女』の

- 到来』平成六・一〇 名古屋大学出版会)、小谷野敦『「こころ」は「同性愛小説か?」(『夏目漱石を江戸から読む』平成七・三 中公新書)、小森陽一『漱石の女と男』(『漱石を読みなおす』平成七・六 ちくま新書)、大橋洋一『クイアー・フアーズの夢、クイアー・ネイションの夢―「こころ」とホモソーシャル』(『漱石研究』平成八・五)、中山和子『「行人」―家族の解体から浮上するもの』(『漱石研究』平成九・一一)、飯田祐子『彼らの物語』(前掲書)、塚本靖代『ホモソーシャル体制のなかの「妹」―「それから」を例として』(『言語情報科学研究』平成一一・六)、遠藤伸治・有元伸子『「行人」における主体の希求と回避 あるいは解釈の振幅について』(『漱石研究』平成一二・一〇)、森本隆子『「行人」論 ロマンチッククラブの敗退とホモソーシャルティの忌避』(『漱石研究』平成一四・一〇)、チャルシムシエク・ニライ『夏目漱石『こころ』論―ホモソーシャルな絆・恋愛・自由な人間―』(『静大國文』平成一七・三)、阿部曜子『ホモソーシャルな男たち―グリーン「情事の終わり」を漱石『こころ』を介して読む―』(『四国大学紀要(A人文・社会科学編)』平成一九・三)、キース・ヴィンセント(小川寛大訳 生方智子編)『夏目漱石『こころ』におけるセクシュアリティと語り』(ハルオ・シラネ・藤井貞和・松井健児編『日本文学からの批評理論 アンチエディプス・物語社会・ジャンル横断』(平成二二・八 笠間書院) などがある。
- (8) 高田里恵子『文科大学の学者ということ あえて品位を欠いた考察』(『漱石研究』平成一四・一〇) 参照。
- (9) 海水浴が保養としての意味合いを強める一方で、高島吉三郎編述『海水浴』(明治三二・六 明文社)、内田綱太郎『海水浴』(明治三五・八 金港堂)、栗本東明『海水浴』(明治四四・七 文星堂・新橋堂)等の(擬似)医学書は、依然として神経過敏や神経衰弱の治療法として海水浴を紹介している。また、後藤省吾『神経衰弱症』(明治三八・七 交益社)には、海水浴について、「之れは海水中に直接に入り込む事にして一般には大効あるが如くに信ぜらる、然れども之れ尤も注意すべき事にして決して医師の許諾なく或は監督なくして行ふべきものにあらざり、」(『神経衰弱症の警戒』(明治四四・二 日常百珍拾銭叢書刊行会)にも「此の療法は注意を用ひないと却つて危険に陥る事

がある。重症者には禁物であるし、軽症者にも適せぬ場合がある。医師の診断の後其の許を得て、相当の監督者の下に実行すべきである。水浴の時間は短い方が良く、又水浴の回数も少ない方が良い」とあり、神経衰弱の治療法としては医師や監督者の厳密な判断を必要とする行為であることが強調されている。

(10) 田村化三郎『神経衰弱根治法』(明治四四・八 健友社)、佐野彪太 関・日原研次『最新神経衰弱自療法』(明治四五・二 有朋館) 等参照。

(11) 筒井清忠『日本型「教養」の運命』(平成七・五 岩波書店) 参照。

(12) この点については、拙稿「夏の日の恋ー江見水陸『海水浴』の力学ー」(『日本文学』平成一三・一一)を参照のこと。

(13) 漱石の「虞美人草」(『東京朝日新聞』明治四〇・六〇一〇)も、甲野と宗近が比叡山に登る場面から開始され、「行人」でも、一郎とHさんの伊豆旅行の中に箱根の山に登る場面が登場する。漱石テクストにおけるホモソーシャルティは海辺だけに顕在化するものではないが、本稿は海辺の近代に対する文化的考察の一環であるため、ひとまず登山の問題は措くことにする。ちなみに、「虞美人草」における登山の問題を分析した論考に、杉田智美『虞美人草ー風景の共有ー』(『解釈と鑑賞』平成一三・三)がある。

(14) 中山和子『「行人」ー家族の解体から浮上するもの』(前掲)も、「三沢と二郎とはまがいもなく「ホモソーシャル」共同体の絆に結ばれている」と指摘し、森本隆子『「行人」論 ロマンチッククラブの敗退とホモソーシャルティの忌避』(前掲)にも、「関係の裂目に顔を見せる女の性に恐怖し、その恐怖をホモソーシャルな関係性で防衛しようとするのが、二郎自身のセクシュアリティである。そして、「行人」全編につねに底流している二郎と三沢の友情関係こそ、実は二郎のこのようなセクシュアリティを無意識に支えるホモソーシャルな人間関係を表象するものではなかったのだろうか」といった指摘がある。

(15) 飯田祐子『「行人」 二郎と一郎』(前掲書)は、この箇所であらゆる「性の争ひ」を、二郎の「三沢への同一化によるもの」であり、「二郎と三沢との競い合いによって生じている」ことであると指摘する。

(16) 吉川仁子『「行人」論ー「あの女」のゆくえー』(『叙説』(奈良女子

大学)平成一五・一二)も、「二郎は、「あの女」と関わりぬところで「性の争ひ」を作り上げている」ことを指摘している。

(17) 飯田祐子『「行人」 二郎と一郎』(前掲書)は、「行人」を、「二郎と一郎のばらばらでしかも濃密な関係が、彼らとはまったく異質なものとされる直を挟んで、三角形の中で語られるという物語」として捉え、「ホモソーシャル」という概念にぴったりと符合する」と述べている。

(18) 武知京三・宇田正「和歌山における交通の発達」、高嶋雅明「和歌山ー経済発展と地域の変貌」(『南海道総合研究所編『南海沿線百年誌』昭和六〇・五 南海電気鉄道) 参照。

(19) 小谷野敦『「こころ」は「同性愛小説」か?』(前掲書) 参照。

(20) 大橋洋一「クイアー・フアーザーの夢、クイアー・ネイションの夢ー『こころ』とホモソーシャルー」(前掲) 参照。

(21) 和歌山の夜における直の言動についてはこれまでも様々な解釈がなされている。例えば、須田喜代次『「行人」論(2)ー「男の道徳」ー「女の道徳」ー』(石原千秋編『日本文学研究資料新集14 夏目漱石・反転するテクスト』平成二・四 有精堂)は「長野家の着物を脱ぎ、宿の浴衣に着替えることによって、直は家に結び付けられた女である嫁としてではなく、その家を振り捨てた一人の女として二郎の前に立ち現れて来る」ことを指摘し、秋山公男『「行人」の主題と構造』(浅田隆・戸民子編『漱石作品論集第九卷 行人』平成三・二 桜楓社)は「夫の企みを察知し、それを逆手にとった二郎操作であり夫への間接的な復讐である」とする。また、藤澤るり『「行人」論ー言葉の変容』(同)は、直は「長野家」の、ではない自分の言葉で語っている」とし、内田道雄『「行人」の語り手と聴き手』(同)は「夫への憤怒を底流させている」と読んでいる。一方、小谷野敦「女性の遊戯」とその消滅ー夏目漱石『行人』をめぐる(『片岡豊編『日本文学研究論文集27 夏目漱石2』平成一〇・九 若草書房)は、直が「ただ、自らのセクシュアリティが義弟との間に喚起する艶な緊張感と戯れ、遊んでみせたのにすぎない」ことを指摘し、この夜の直の振る舞いを「遊戯」として捉えている。

(22) 小森陽一「交通する人々ーメディア小説としての『行人』ー」(『日

本の文学』平成二・一二)も、直が「自分で固有なる自分を「所有」する方途は、死の瞬間しかない」と指摘している。

(23) 内田道雄『「行人」の語り手と聴き手』(前掲書)は、和歌山の夜を「二郎がもう一つの主体としての直の内面にはじめて向き合う」と捉えている。

(24) 例えば、佐々木英昭「男の絆―『行人』の同性社会的世界」(前掲書)参照。

(25) 中山和子『「行人」―家族の解体から浮上するもの』(前掲)も、「宅中で一番欲の寡い善良な人間」だというお貞さんの「聖化」は、こうした彼女の階級的隷属関係をみごとく隠蔽するものである」と指摘している。

(26) 森本隆子『「行人」論 ロマンチッククラブの敗退とホモソーシャルティの忌避』(前掲)も、こんこんと眠り続ける一郎の姿で閉じられる「行人」の最終場面を「透明であるべき近代自我を徹底的に追求し、そして敗れた一郎は、いわば意識のゼロ度において、自分の存在が、自分を「親愛する」Hさんから自分を「親愛する」二郎へと、再びホモソーシャルな関係性の中を「敬愛」という記号のもとに、引き渡され、流通することを無言のままに拒み、円環を描いて閉じようとする『行人』というテキストに亀裂を走らせ続けるのである」と読んでいる。

(27) 石原千秋『漱石の記号学』(平成一〇・四 講談社選書メチエ)参照。

付記

本稿で扱った作品本文の引用は、『春』(明治四二・一〇 上田屋)、『行人』(大正三・一 大倉書店)、『ころろ』(大正三・九 岩波書店)により、引用にあたっては旧漢字を新漢字に改め、原則としてルビは省略した。

(せざき けいじ、広島大学文学部准教授)